

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究実施方法等

1 実践校について

実践校名	(かごしまけんりつめいおうかんこうとうがっこう) 鹿児島県立明桜館高等学校		
	学科名	生徒数	学級数
	文理科学科	337	9
	商業科	239	6

2 実践研究の対象

キャリア教育推進の取組は、商業科、1・2年（4学級、159名）を中心に実践研究を実施し、創立10周年記念に伴うノベルティーの開発に関する取組は、商業科2・3年が履修する科目「課題研究」の「地域貢献活動」コース選択者38名で実践研究を実施した。

3 実践研究の実施経過

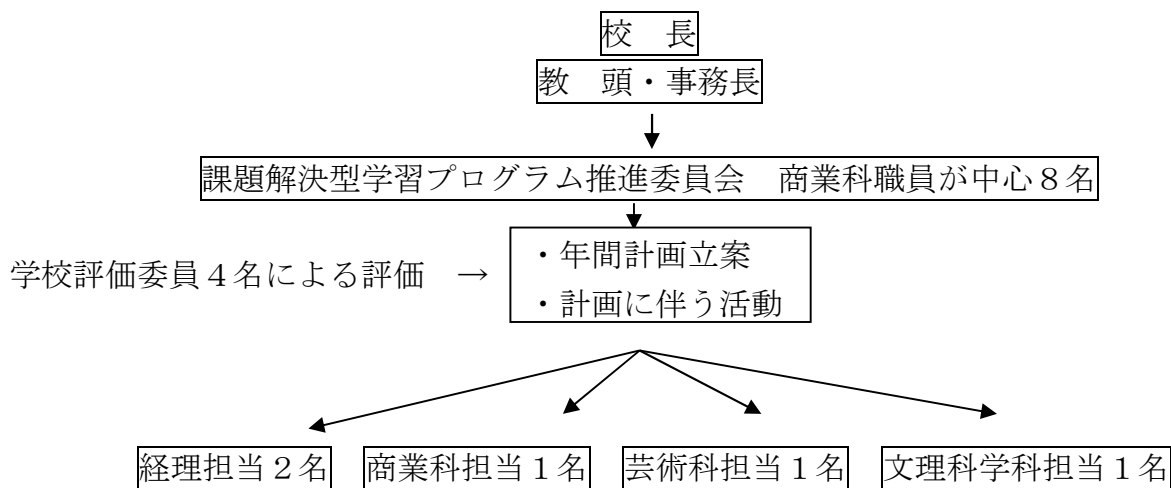
取組時期	指導（活動）の概要	取組時期	指導（活動）の概要
平成29年度	1月～2月 NPO法人「国際理解プログラム研究会」大重龍三（会長）氏と「異文化交流」を実施する。 鹿児島大学留学生を「課題研究」へ招請する。	7月 10月 12月	地元の経営者大重龍三氏監修の創立10周年記念品（カレー）の企画・試作で指導を受ける。 12/14(金)に最終プレゼンを実施し、レビ [®] 決定する。10周年記念品ノベルティー化。
	1月24日（水）～1月26日（金） 進路希望や興味・関心により企業訪問等、8コースを設定し、少人数で伺い、民間や公共機関の協力を得て体験的に学習する。	10月	伊佐市 Web デザイナーの小門幸江氏監修の創立10周年記念品（カレー）商品化に伴い、パッケージデザイナーで指導を受ける。
	2月5日（月）～2月9日（金） 商業科2年生のインターシップ（約70社受入）（就業体験学習）を実施する。	平成30年 10月16日（火）	キャリア教育を推進するため、生徒の希望制で9事業所において研修を設定し、新入社員研修と同等の体験的研修を受ける。 （事後、感想文を礼状と共に郵送する。）
	3月1日（木） 課題研究集「道」の発行・卒業生へ配布 今までの学習状況に関する内容をまとめる。	12月20日（木）	キャリア教育を推進するため、MLB ジャパンの十原啓志郎氏を招き、海外で活躍するまでの経緯や体験談を聴講する。
	3月2日（金） 伊佐市 Web デザイナーの小門幸江氏による、知的財産や意匠（デザイン）に関する研修会を、ワークショップ形式で実施する。	平成30年 2月4日（月）～2月8日（金）	商業科2年生のインターシップ（約60社受入）（就業体験学習）を実施する。 創立10周年記念品の完成とPR活動に取り組む。課題研究集「道」を発行し、卒業生に配布する。

4 実践研究の実施体制

(1) 課題解決型学習プログラム推進体系の確立

本教育実践プログラムの実施に際して関係機関に協力を要請した。また、課題解決型学習プログラム推進体系を昨年度同様まとめることができた。本実践研究の目的に合わせた研修・講義等を商業科職員及び本校教職員等と連携しながら内容の精査・検討を行い、より効果的な研修内容になるよう企画した。その結果、地域や地元企業の全面的な支援・協力によって、本プログラムを実施できた。特に、専門性を有する外部講師との連携は、授業内容の検討や生徒の実態把握、実施日程等の連絡調整を密にしながら充実した研修を実施することができた。

研修で使用される教材の内容や専門的内容を外部講師との間で共有しながら、より効果的な展開を追究した。研修内容については、外部講師が本校の教育活動に対応をしていただいたことで、比較的円滑に進めることが可能となった。



経 理 担 当・・・ 当事業の経費管理（監査体制を考慮し、2名）

商 業 科 担 当・・・ 商業科におけるメインの担当，外部との連携の窓口

芸 術 科 担 当・・・ デザインや創作活動の連携

文 理 科 学 科 担 当・・・ 学校全体として，文理科学科とも連携（講演会等も受講させる。）

① 所属団体

ア 明桜館高等学校：事業対象校・授業実施者

イ NPO 法人「八重の会」：学校と関係機関との連絡調整等のコーディネート全般

ウ NPO 法人「国際理解プログラム研究会」：留学生と関係機関との連絡調整等のコーディネート全般

エ かがしま商工会郡山支所：学校と関係機関との連絡調整等のコーディネート全般

オ 大阪経済大学簿記会計研究部：キャリアに関する有識者からの話題提供

カ 税務署や地元企業：経理や会計処理等に関する話題提供

② 構成委員

- ア 明桜館高等学校：鯨坂嘉彦（校長），九田泰好（商業科主任）
- イ NPO 法人「八重の会」：末吉 勇（会長）
- ウ NPO 法人「国際理解プログラム研究会」：大重龍三（会長）
- エ かがしま商工会郡山支所：郡山春祭り実行委員会，郡山保育園，郡山校区コミュニティ協議会・花尾地域コミュニティ協議会，南方まちづくり協議会
- オ 大阪経済大学簿記会計研究部：浅田拓史（准教授）
- カ 税務署・九州財務局や地元企業の各担当者

(2) 実践研究の評価等

- ① 本実践研究のプログラムを実施する上で重要なことは，商業科教職員間での意識共有である。本プログラムにおける教育内容に関し，各担当教員が重視する分野が異なるため，実施に際し，教科会等で慎重に議論を重ねた。また，外部との連携を図るために，日程調整をすることも重要な要素であった。外部講師による研修の実施は，学校行事とのバランス，外部講師との予定に関する折衝と2つの側面から配慮が必要であった。研修内容，教材，資料準備までを依頼することになるため，担当者との入念な準備期間も必要であったが，生徒の実態や本校教育活動をあらかじめ理解しての承諾であったため，昨年度同様スムーズに実施することができた。
- ② 本年度の研修の実施方法等についても，昨年度同様商業科で検討を重ねた。結果として「全校的に」対象生徒を拡大した場合，年間の学校行事との調整等が発生した。また，教授方法についても，生徒数が増えるほど課題解決を目的とした活動における制約が大きくなった。グループ単位で研修を複数回展開することも検討したが，上記①からも外部講師との予定調整ができないため，商業科1・2学年を対象に実施した。
- ③ 「商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ，ビジネスの意義や役割について理解させるとともに，ビジネスの諸活動を主体的，合理的に，かつ倫理観をもって行い，経済社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。」という教科の目標を実現させる観点からも，本プログラムでは実社会の様々な側面に目を向けさせることができ，社会的課題を深く考察できる絶好の機会となった。段階的に様々な分野について連続性をもった内容で実施出来たことが，相乗的に教育効果を高めていくことにつながったと考えられる。

5 教育委員会等として取り組んだ内容（昨年度の内容を掲載）

- (1) 実践研究が円滑に実施できるように，実践校と連携を密に取れるような体制づくり及び情報提供
- (2) 実践校が取り組んでいる内容等を関係機関へ情報提供するなどの周知活動

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：鹿児島県立明桜館高等学校（商業科）

概要

生徒自らが能動的に学びながら、課題を見つけ、その課題解決に向けて協働的に学ぶアクティブラーニングを展開する。生徒一人一人の知識・技能の習得を目的としながら、地元企業及び専門的な立場の方々との連携を通して、主体的に社会に参画し、自立して社会生活を営むために必要な力を身に付ける。

学習プログラムの目標

- 1 社会の多様な側面を知ること、生徒自身のワークキャリアやライフキャリアをプランニングするキャリア教育の要素も組み入れ、現代社会を生きる人としての在り方を自覚する一つの契機とする。
- 2 社会的課題に対して当事者意識を持ち、積極的に社会参加できる資質と意欲を養う。
- 3 社会における様々な側面を身に付け、理解を深め、社会的課題の探究、問題意識の醸成を行い、社会を構成する自立した主体者に必要な視点・力を身に付けさせる。
- 4 創立10周年記念品の開発を通し、「商品開発」の基本的な知識・技術を習得させるとともに、生徒自ら企画するケーススタディの実践により、科目「課題研究」における地域貢献活動をより充実させる。地元鹿児島市郡山地区の諸団体や企業と連携・協働して作成したケース教材をケーススタディとして用いる。

学習プログラムの主な内容

- 1 創立10周年記念品「カレー」の監修とノベルティー化のためのレシピ候補決定
NPO 法人「国際理解プログラム研究会」会長 大重龍三（地元のカレー店経営者）氏から、「カレー」に関する素材・調理法等について、グループ単位で指導を受け、プロの視点から助言をいただき、商品開発に取り組みさせた。
- 2 創立10周年記念品「カレー」のパッケージデザインに関するワークショップ開催
デザイナー 小門幸恵（現鹿児島県立伊佐農林高等学校非常勤講師）氏から意匠の創造及び活用を促進するため、パッケージデザインに関する専門的知識・技術の養成及び資質の向上を目指し、生徒自らが意匠に関する課題解決をするためのワークショップに取り組みさせた。
- 3 キャリア教育推進のための体験的校外研修の実施
進路目標の早期設定とこれからの社会を生きる人としての在り方を早期から自覚させるため、地元企業・団体に協力を要請し、様々な職種毎に研究テーマを設定し、生徒の希望制及び少人数制で体験的にフィールドワークを実施した。

4 「匠」から学ぶキャリア教育推進セミナーの開催

上記3同様、鹿児島県薩摩川内市出身で現在メジャーリーグジャパンに勤務されている十原啓史郎氏に協力を要請し、海外で活躍するまでの経緯や体験談を講話して頂き、人生における目標を定め、きちんと行動していくことの大切さについて学ばせた。

本実践研究は商業科が対象であるが、今回は貴重な講話と考え、本校のキャリア教育係の協力を得て、全校生徒を対象に実施した。

5 課題研究集「道」Vol 2の発行

2年間にわたる本プログラムの各実践内容と生徒の変容をまとめ、保護者に対しても情報提供できるよう商業科全員を対象に発行した。編集において、実践内容によっては、研究の協力者から指導・助言をいただいた。

学習プログラムの成果の概要

2年間の本実践研究終了後、集約した生徒のアンケート結果やレポートの内容を実施前と比較したところ、下記の成果を得た。

- (1) 生徒が興味・関心を持つようなきっかけ作りや環境作り。生徒の専門的知識・技術の深化、学校及び地域や社会の果たす役割、更に社会で働くことの意義を再認識したり、異年齢層との関わりに応じ、適切なコミュニケーション能力を高めようとしたりするきっかけとなった。
- (2) 互いに関わり合いながら共に生きる社会の一員としての自覚が高まり、それぞれの立場で協力し合いながら、社会・経済生活を築いていく意識と責任を高めようとするきっかけとなった。
- (3) 専門的かつ社会・経済生活を送る上で必要な知識と技術が身に付き、主体的に学校や地域の生活を送るための能力と実践的な態度を高めようとするきっかけとなった。

以上のことから、キャリア教育、商品開発に関して、生徒の興味・関心が高まり、社会の諸課題に対する問題意識や専門的な知識等に関しても理解を深めたいという意識も大きく高まった。社会を構成する主体者としての生徒の意識改革において、本実践研究の教育効果への影響は大きかった。

しかし、準備を要する時間や担当者の割当の関係から、成果をできるだけ早く生徒にフィードバックできるような仕組み、プレゼンテーションやディスカッションの評価、例えば自己評価・生徒間相互評価若しくは事業所評価やコミュニケーション能力を高めるための自己評価と他者評価が完全に構築されずに終わってしまったことは、反省すべきである。

